

スピリチュアル・ユニヨンの行はれん事

今関 恒夫	同志社大学文学部教授
奨励者紹介 [いまぜき・つねお]	研究テーマ 一六・一七世紀イギリスにおけるプロテスタンティズムの社会的思想的影響

はじめに

本日は、同志社スピリット・ウィークの一環として、何かお話しするということなのですが、私がそのような話をするに適した人間だとはとても思えません。ただ、顧みますと、もうすでに三十七年ほど同志社大学のお世話になっておりまして、その間に同志社大学の空気を吸って生きてきているわけですから、その意味では、私自身、何か同志社らしさを身に帯びているのかもしれない。

もうずいぶん以前のことになりますが、先生方が集まった何かの機会に、同志社精神とは何を意味するのだろうか、というような話になったことがあります。そのときは、新島先生の理想や、その後の同志社を担ってきた代表的な方々の思想や行動から、同志社精神とは何かを考えるというのではなく、今、現に学生である方々の精神、スピリットはどのようなものか、というような方向で話が進んだように記憶しています。結論は、曰く言い難いところがあるにしても、同志社大学の学生・出身者には、やはり他大学の学生・卒業生と比べると歴然とした特徴があるのではないか、ということでした。伝統とは何かそのようなものであって、箇条書きにして、これが同志社精神だ、ということは難しいが、そう簡単に消えて無くなってしまようなものではない何か、というわけです。

そのように、曰く言い難いところがあるにしても、現に生きている同志社の精神や伝統やスピリットは、新島先生にはじまる長い同志社の歴史のなかで培われてきたものであり、さまざまな要素が絡まって複雑です。さらにまた、同志社スピリットといったものは、同志社の歴史のなかから新たにすくいだし、鍛えなおし、私たち自身が進むべき道を指し示すものとして、規範的意味をもっているかもしれません。その場合にも、何を新たにすくいだし、どう生かすのか、という点については意見の相違があるに違いありません。だからこそ同志社スピリット・ウィークでさまざまな面から、多様なお話がなされてきたのでしょう。

私自身は、新島先生についても、同志社大学の歴史についても、常識的なことしか知りませんので、同志社大学に即して、同志社スピリットとは何かとか、それがどのようにして成立してきたのか、というようなことについて話することはできません。今日、お話ししたいと思いますことは、新島先生の信仰や行動の背後にあり、同時に同志社の歩みを導いてきたであろう、いわゆるピューリタニズムの側面についてであります。しかも、アメリカをとりこえて、イギリスの場合についてであります。

会衆共和主義

本題に入る前に、本日のお話の題である、少し思わせがりの言葉について説明しておきます。これは明治以降の日本教会史の重要な出来事との関連で述べられた言葉です。一八八六年（明治十九年）ごろから、長老主義を奉ずる「日本基督一致教会」と会衆主義を奉ずる「日本組合基督教会」との合同問題が起こり、一八九〇年にそれが不首尾に終わったという出来事がありました。この二つの教会の指導者には、相当強い合同への熱意があったにもかかわらず、それがうまくいかなかったのは新島襄の強力な反対があったためであります。新島の反対理由に関しては研究者の意見に相違があるようですが、今日は、そのことに触れるつもりはありません。一八八八年に、一致教会の有力な委員であった井深梶之助が、新島に教会合同問題についての意見を求めてきたのに対して応えた手紙が残っています。そのなかで新島は、要約すれば、長老派・監督派・メソジスト・バプテストの各教派はそれぞれの長所をもち、有益な教会であると自分は思う、しかし、「教会の政治上に関しては、会衆共和主義を固取欣奉するものにこれ有り」とし、それゆえに各教派の関係は「スピリチュアル・ユニオン」にとどまるべきだ、と言っているように私には思われます。つまり、二つの教会が合同し制度的に一体となるのではなく、それぞれの教派の長所や特徴を堅持したうえで、相互の精神的というのか、霊的というのか、そういう「至美なる」関係を維持していくのがよいのだ、というのであります（注１）。

（注１）「かねて貴兄には御存じはこれ有るかは存じ申さず候へ共、小生は元来教会の政治上に関しては会衆共和主義を固取欣奉するものにこれ有り候処より、今の憲法草案が、採用実施せらるゝの日には、会衆共和主義は、漸々その跡を隠くし、寡人政治は早晚我が会中に侵入し来るは、到底免がるべからざるの事実と存じ、心中大いに安からざる所あり。／＼小生の右様陳ぜしは、敢て聯合を拒みしに非らず。区々老婆心の余り、痛く軽率未熟の聯合を非とせし次第にこれ有り候。・・・両会が相互ひの組織を講究し、互ひに相識り、相信じ、実に申分のなき結合が出来、将来更に分争の憂ひをも生ぜざる事ならば、至極と申せし事もこれ有り候。これは他にあらず、小生は曾て形而下の聯合よりも、寧ろ形而上の併合を望み、又アルティフィシエル・ユニオン (artificial union) よりも、寧ろナチュラル・ユニオン (natural union) を主張し、独り我が欣奉する共和主義なる会衆教会のみを指して、真正の教会とは見做さず。プレシバテリアン派 (Presbytery 長老会) の諸教会より監督、メソディスト・浸礼の諸教会に至る迄で、各々長所の存する所あれば、小生は皆地上有益なる教会と確認し、これを尊敬し、これと交はり、共に主の聖旨を地上に達せんと存じ、此の教会の間に於て、至美なるスピリチュアル・ユニオン (spiritual union) の行はれん事を希図する所より、縦令、形体上の合併を為すに於ても、成るべく文け、ナチュラル・コース (natural course) に任せ、双方の切望満足する所を以て、聯合あれかしとの意なり。（井深梶之助宛、新島襄の書簡、一八八一年、同志社編『新島襄書簡集』岩波文庫）

新島は、ここで自分は「会衆共和主義」の立場に立つということをはっきり言っています。それは、会衆派とか組合派とかいわれる教会組織上の立場だといってしまうえば簡単ですが、何故新島がそれにこだわるのか、ということの方が重要であります。そのことを新島の信仰や思想に即して論証することは、私にはできません。ここでは、新島の「会衆共和主義」へのこだわりの意味を見きわめるために、外堀から攻めていくことにいたします。

「会衆共和主義」について、ごく一般的な説明を加えれば、次のようなことになるでしょう。主体的な信仰をもった個人が、それぞれの一致点と相違点を認めながら自由に結びつき、会衆（Congregation）（注２）をつくり、さらにそのようにして結びついた会衆が同じように、たがいにいかなる強制もなしに自発的に結びつき、より広範な会衆相互の関係を形成していくか、そのようにして、教会をつくりだし、社会を基礎づける。そのような考え方を「会衆共和主義」と言ってよいでしょう。

（注２）ここでは「会衆」という用語をあまり厳密に定義しないことにします。「教会」といいますと、やや抽象的な意味合いを含みますが、「会衆」といった場合、個別の教会に集まってくる具体的な信徒の集まりぐらいに理解しておきます。

もし、そのようにみてよいとするならば、新島はこうした集団の在り方をアメリカで学んだのでありますが、起源をたどれば一六世紀終わりから一七世紀のイギリスに行きつくことになります。これから、今まで述べたことと関連づけながら、イギリスのピューリタニズムについてお話しします。

ピューリタニズムについて

前置きはできるだけ短くしたいのですが、ピューリタニズムという言葉はなかなか厄介な内容をもちますので、その点についても少し触れておきます。「ピューリタニズム」は長老派とか会衆派とかバプテストとかいう教派を表す用語ではありません。ピューリタンという言葉が最初に用いられたのは一五六〇年ごろのことでした。一五三〇年代にイングランドの教会はローマ・カトリック教会から分離し、監督制のイングランド国教会を成立させます。はじめは、教義のうえでも、制度のうえでもカトリック的なものが強く残りますが、しだいに大陸の宗教改革思想の影響を受けるようになります。メアリー女王の時代にローマ・カトリックに逆転しますが、一五五八年にはエリザベス一世が即位し、イングランド国教会を復活させ、独自のプロテスタント教会としての道を歩み始めることになります。ところが、その独自性をプロテスタント教会としての改革の不徹底として、さらなる改革を要求する人びとが姿を現すのです。かれらは「ピューリタン」という名で誹謗されます。「やかし屋」とか「偽善者」などとも呼ばれていまして、「ピューリタン」はもともと悪口だったので

さて、ピューリタンの教会と社会における意志決定の在り方を見事に解明した古典的名著として、Ａ・Ｄ・リンゼイ『民主主義の本質—イギリス・デモクラシーとピューリタニズム—』（注３）があります。まず、その書物の内容の一部をできるだけ噛み砕いて紹介してみたいと思います。ピューリタンの教会と社会における意志決定の在り方の問題は、新島の「会衆共和主義」と関係すると思われるからです。

（注３）Ａ・Ｄ・リンゼイ（永岡薫訳）『民主主義の本質—イギリス・デモクラシーとピューリタニズム—』、未来社、増補版一九九二年

リンゼイは、その書物のなかで、近代民主主義の源流は一七世紀イギリスのピューリタンの会衆の意志決定あるいは統治の形態にある、と主張するのですが、当時のピューリタンはどのような状況に立たされていたのでしょうか。

言うまでもないことですが、一七世紀にはいっても、イギリスの主流教会は国教会でしたから、建前上、イングランド国民はすべて国教徒でなければなりませんでした。しかし、実際にはピューリタン勢力が存在し、彼らはさまざまなかたちで国教会やその末端組織である教区の住民と対立しました。ピューリタンたちの在り方はさまざまです。穏健なピューリタンは国教会の教区教会に属しながら、自分たちだけで集会を開き、信仰を深め、日常的にも助け合って生活をしていました。もっとはっきりと国教会に対して不満をもつピューリタンは、国教会から分離して、長老派・会衆派・バプテスト・クエーカーなどの教派をつくります。いずれにしても、国教会から身を守りながら、どのように自分たちの信仰を維持し、集会を運営していくかを、自分たちで探っていく必要がありました。大陸の宗教改革が生み出した教派組織の影響や、熱心なピューリタン教職者の指導力は強力でしたが、一般の信徒もピューリタン集会の成立・維持に重要な役割を果たしました。いわゆる「ピューリタン革命」期（一六四〇年から一六六〇年）を除くと、歴史的事情による変化はありますが、ピューリタン集会は国教会の抑圧下にありましたから、ピューリタン牧師や信徒は、彼らの小さな集会や教会での共同生活や討論に真剣に取り組み、自分たちの信仰に忠実であろうとしたのです。

神の意志の発見と民主主義

リンゼイは、当時のピューリタンが、その自治的会衆（the selfgoverning congregation）内の「小さな民主主義」（the small democracy）の経験、つまり「共同の生活や討論（common life and discussion）」による神の意志を発見する過程を重視したことに注目しました。ピューリタニズムに民主主義の源流あるいは本質を見だし、それこそが、今日に

おいても、民主主義社会が立ち返るべき原点だと考えたのであります。しかし、それは単に政治制度の問題ではなく、いわば民主主義のスピリットの問題でもあるように思いますので、さらに掘り下げてみていくことにします。

リンゼイはまず、平等派の民主主義思想をめぐるパト二会議における議論を問題にいたします。パト二会議というのは、内乱が一段落した一六四七年の十月末から十一月にかけて開かれた会議です。内乱を戦った議会派内の急進派である平等派が提出した「人民協定」の可否をめぐる、オリヴァ・クロムウェルなど軍幹部と士官や兵士が議論を戦わせたのです。その詳細は省略いたしますが、この会議の中で平等派の精神をもっと明確に理解していたのはクロムウェルであった、とリンゼイは言います。

「クロムウェルにとっては、民主主義機構の目的は、各人の抑えがたい良心が語る事柄に耳を傾けることによって、また、神の意志を学ぼうと望んでいる人々の、率直で忌憚のない討論（frank and open discussion）に基づいて、みいだされなければならない何ものかを看破し、発見することにあります。彼が、キリスト教的集会という、小さな民主主義の経験から学んだものは、民主主義社会における共同の自治的な生活や討論から得られても、それ以外のものからはなにも一つ得ることのできない、人間生活の目的を把握する洞察力でありました」。（傍点今関、以下同じ）

まず、「神の意志」の発見とその実現を熱心に望んでいる人びとの存在が前提されます。ここで「神の意志」という言葉を、わたしたちの社会とか、大学とか、仲間とかが今最も必要としている何かだ、と読み替えてくださってもよいでしょう。それをどのようにして発見するかが、今ここでの問題です。パト二会議でのクロムウェル自身の言葉にちょっと耳をかたむけてみましょう。

「現に、われわれは、多くの人々が語りかけてくれるのを聞いてきたのであるが、それらの人々のさまざまな言葉を通して、神がわれわれに話しかけておられたことを認めざるをえない」（クロムウェル）。

クロムウェルは、ここで、内乱によって生まれた事態や先行きといった問題について真剣に、良心的に心をめぐらせている人びとが集まり、それについて語りあい、聞きあうとき、一人ひとりの言葉をとおして真実が現れてくる、と言っているように思えます。パト二会議に即して考えてみますと、そこには、多くの一般兵士たちと、最高位から下級士官まで各位（くらい）の軍の幹部が参加していました。しかし、参加者の発言は、そうした位や身分に関係なく、等しく尊重されねばなりません。誰をとおして、神が語りかけられるのかは誰にも判らないからです。ただ、誰か特定の人が特別な神の啓示をうけて、神の真理を語るのだから、耳をすましてそれを聞こう、と言っているのではなさそうです。

ここでリンゼイが注目しているのは、小規模な「キリスト教的集会」（congregation）＝「自発的な共同体」です。そこに集まる人びとの「抑えがたい良心」が語る事柄をとおして、神は自らを示そうとされる、とクロムウェルは言っているのです。彼らの「率直で忌憚のない討論」が「神の意志」を発見するための最善の方法だということです。パト二会議で実際に、地位や身分に関係なく「率直で忌憚のない討論」が行われたのかどうかは問題ですが、このような会議が開かれた真の理由と意味はそこにあったし、そのことをほんとうに判っていたのはクロムウェルだ、とリンゼイは言うわけです。

ここでパト二会議をはなれて、もう少しことがらを一般化して考えてみましょう。「率直で忌憚のない討論」あるいは「共同思考」（collective thinking）を可能にする条件は、これまで述べてきましたように、そこで討議される問題を良心的に考えている人びとの参加であり、そこでの意見は発言者の社会的地位に関係なく公平に扱われるということでしたが、さらにそれに加えて、「共同の生活・活動・経験」ということをリンゼイは言います。「神の意志」の発見と実現という共通の目的（信仰）をもち、共通の生活と経験を有する人びとの集団が作りだす「同意」というよりもむしろ「集いの意識」（sense of meeting）が、「神の意志」の発見に導く筋道を整えるということです。

リンゼイは、この「集いの意識」という言葉になかなか微妙な意味をもたせておりまして、すっきりと理解するのがなかなか難しいのですが、もう少し説明をしておきます。リンゼイはこう言っています。

「討論が想像力豊かなものであるためには、共通の目的が、その討論に参加している人々を動かしていることが必要・・・であります。そこでは討論に加わっている人たちが何ものかを見いだそうとしています。かれらは自分たちの属している共同社会が、その目的から見て、何を必要としているか、と問いかけているのです」。

小さな宗教的集会の「集いの意識」

本当に実りある討論が可能なのは、自分の属する共同社会のなかで、その目的に照らして、何が必要かを問うような場合だというのですが、その共同社会に属しているという自覚を「集いの意識」としているのです。次のような興味深い指摘もあります。

「うまく運営されている、ほどよく小さな民主的集団においては、ほとんど投票が行われていないことが多いということは、わたしたちにとって一つの驚きであります。他の処では投票によって決められなければならないことも、ここでは集いの意識とでも呼ばれるものによって解決されていくのであります。・・・その事がうまくいっている時には、そこでの討論はその集会のもつ集いの意識によって支配されて調整されているのです。・・・集いの意識が功を奏している場合には、その意識によって、討論は共同の目的に仕え、また逆に、共同の意識によって調整されることが、保障されるのであります」。

注意すべきは、これは「小さな宗教的集会」についていえることであり、そこに民主主義の原型をリンゼイは見ているのであります。言い換えれば、以上述べたことは、そのまま一国の政治的民主主義に当てはまるわけではありません。それは民主主義の原型としての意味をもつと考えられているのであって、一国の民主主義ということになると、別な要素を考慮する必要があるのですが、その点についてここで深入りすることはできません。ただ、「小さな宗教的集会」の経験は、直接「国家」に繋がるのではなく、その中間に「社会」が考えられているということについて触れておきます。

人間一人ひとりとは、どんなにかけがえないものであっても、「観念的な抽象的孤立」のうちに生きるのではなく、なんらかの「制度的・共同的な社会関係において」はじめて生きることになるので、という認識によって補充されて、はじめて民主主義的な思想は完全なものとなる、としたうえで、リンゼイは次のように述べています。

「その認識を言い換えれば、最良の社会というものは、のびのびとした自然さと人間的な活気とその変化に富んだ多様性を助長するものであるということ、しかも、それらは基本的には国家によって助長されるのではなく自発的な共同体のすべてが互いに絡み合うことによってつくられた、この豊かな合成体によってなされるのだということの認識でもあります」。

ここで「自発的な共同体」とは、先ほどから述べている「小さな宗教的集会」、あるいはもう少し一般的に言えば、少人数からなる自発的な公共心に富んだ、緊密な共同体・共同社会のことであり、「社会」とはその「自発的な共同体のすべてが互いに絡み合うことによってつくられた・・・豊かな合成体」であります。人間生活にとって最も重要なものは、こうして「自発的な共同体」、さらにはその合成体（「市民社会」）における「彩りに充ちた豊かな生活」、「のびのびとした自然さと人間的な活気とその変化に富んだ多様性」を帯びた生活のなかでのみ生みだされるというのであります。

新島先生が「スピリチュアル・ユニオン」と言われるとき、具体的には、以上述べてきたような共通の目的をもった集団の在り方とそこにおける人間関係、そこでの物事の決定の仕方などの全体を考えていたのではないかと、私は思います。その点をもう一度整理しておきます。

- （一）主体的で、しかも明確な共通の目的をもった諸個人の小集団が存在すること。
- （二）その集団において諸個人は、共同の生活、討論の積み重ねによって、信頼関係にあること。
- （三）集団としての決定は、票決よりも、「率直で忌憚のない討論」から生み出される「集いの意識」によること。
- （四）諸個人は、そのような集団において「彩りに充ちた豊かな生活」を送り、「のびのびとした自然さと人間的な活気とその変化に富んだ多様性」を維持できるとともに、それが〈人間生活にとって最も重要なもの〉を生み出す可能性をもつということ。

新島のアメリカ経験

そのような集団を新島先生は一九世紀半ばのアメリカで見聞し、自ら経験をしたのではないかと思います。新島にとって重要だったのはキリスト教的小集団、なかでも会衆派教会でありました。しかし、それだけではなかったのです。著名な社会学者マックス・ヴェーバーが一九〇四年のアメリカ訪問にもとづいて書いた「プロテスタンティズムの教派と資本主義の精神」（注4）という論文があります。新島が帰国するのは、一八七四年ですから、それより三十年ほど後の経験が基礎となっているのですが、新島が見たアメリカとそう違いはないと思います。

（注4）M・ヴェーバー（中村貞二訳）「プロテスタンティズムの教派と資本主義の精神」（ヴェーバー『宗教・社会論集』世界の大思想、河出書房、所収）

ヴェーバーのアメリカ経験―教派の世俗化＝クラブ

ヴェーバーから少し引用してみます。

「むかしからいまにいたるまで、とくにアメリカ的といえる民主主義のひとつの目じるしは、それが形をなさない諸個人の砂山ではなくて、ひじょうに排他的な、しかし自発的な諸団体の混成物だという点にある」。

「地位のいかにかわりなく、この民主主義社会のなかでひとかどの人物にみられたいのなら・・・自分が何かの教派、クラブあるいは会（Gesellschaften）―じゅうぶんな認証を受けたものでさえあれば種類は問わない―への加入を投票で決められた男であること、さらに紳士の証明を通してそこでゆるぎない地歩をきずいた男であること、このことを例外なしに立証してみせなければならなかったのである」。

「投票によって欠員が補充される世間のクラブや会のげんざいの地位は、それら自発的な団体の原型をなす教派の、ひどく排他的であったむかしの意義が世俗化していく果てに生まれた、この世俗化のはるかな帰結である」。

この時代のアメリカでは、教派の小集団が世俗化してクラブや会に変形し、それらもまた選抜によって入会が許可されるような、共通の目的をもった親密な人間関係をもつ集団となり、教派やクラブや会に属することがひとかどの人物とみられる条件となっているのだ、というわけです。つまり、宗教的には教派、世俗的にはクラブや会という小さな自発的な共同体、それが横につながった「混成物」がアメリカの社会を構成したといってもよいのです。それを「市民社会」と呼ぶことができるように思います。

そのように見てきますと、新島は、教会については教派内および教派間の「スピリチュアル・ユニオン」を願うとともに、当時の社会において、それを支えるスピリットを育むことの必要性を強く感じていたのではないかと思います。それが新島の同志社大学設立の執念につながったのではないのでしょうか。大学教育を通じて、「市民社会」の真の構成員を生みだそうとしたのです。

市民社会のスピリット

新島先生について常識的な知識しかもたない私のような者が、あまり断定的なことを言うのは避けた方がよいのですが、このようなことを考えていたときに、九月二十九日付けの「チャペル・アワー案内」で、新島研究の専門家である伊藤彌彦先生が、教会合同問題と関連づけて、「新島は、・・・アメリカ市民社会に暮らして体得した『自発的結社』の論理を日本社会に移植しようと図った」と書かれているのを見て、大いに力づけられました。そこで、最後に「市民社会」のスピリットとは何なのかという新島先生が問題にされたことを、現代の問題として考えてみたいと思います。

市民社会論は現在非常にさかんであります。それは国家や大企業が必然的に大きな力をもつようになりまして、それに伴って個人の自由・平等が事実上制約されざるを得ない現代の状況と関係があります。市民社会を論じた何冊かの本を読んでもらったら、意外な本を推奨しているのを見つけました。星野英一著『民法のすすめ』（岩波新書）という本の「第四章 民法と市民社会」が、市民社会論とその前提になることがらについて過不足なく論じた、簡潔だが、きわめて優れた記述だ、と書いてありました。法律関係の書物はどうも苦手であり読みませんが、簡潔で優れた市民社会論というので、早速読んでみました。そして、ちょっと意外な発見をしました。そのことは後で申すことにして、この本をもとに、今までの話と市民社会との関連をつけておきたいと思います。

星野氏は広義の市民社会と狭義の市民社会を分けて、前者を〈自律して運行する経済社会と権力機構である国家の二元性を背景とし、経済社会をも含む、国家から一応独立した自立的社会〉とし、後者を〈資本主義経済社会の中で、その弊害に対してみずからを守る団体・活動、NPOなどの利他的・愛他的団体、さらには学会から趣味の集いに至る仲間の団体をも含む、広範な自発的団体と活動〉と定義します。狭義の市民社会につきましても、〈広義の市民社会から市場経済社会をのぞいたもの〉とも、〈一人一人がかけがえのない存在である自由・平等で自立した人間（個人）が自由意志によって結び結ぶ自発的団体ないし社会〉とも言い換えられます。

このような市民社会の定義は、先に述べた一七世紀ピューリタンの「自治的会衆」との関連を感じさせます。もちろん相違もあるわけで、その点を指摘しておきますと、第一に、一七世紀においては、市民社会から経済社会をのぞく必要はありませんでした。その時期の経済社会においては、比較的、社会的経済的地位が対等な小親方や職人（手工業者）、小農民・小商人などが実質的に自由な関係を結んで取引をしておりまして、「自由・平等」が単に理念にとどまるということとはなかったからであります。一方、現代の経済関係は自由な市場経済をうたっておりますが、大企業、中小企業、労働者などの社会的経済的地位は法の前での平等でしかなく、星野氏によれば、「自由は一方当事者の自由、相手方の不自由」となり、両者間には「結果における不平等が生ずる」とことになり、そのような経済社会は市民社会とはいえない、と言うのであります。最近の、報道を賑わせている不況に伴う中小企業の倒産とか、格差社会の拡大とか考えあわせると、狭義の市民社会を考えようとするとき、広義の市民社会から経済社会を除く、という意味がよく分かります。

一七世紀と現代との違いの第二は、自発的集団がきわめて多様になったという点であります。先ほどの引用の中にもありました、NGO・NPOなどのボランティア団体をはじめ、協同組合・労働組合・宗教団体・社会事業団体・文化団体・学術団体・スポーツ団体・レクリエーション団体・消費者団体・環境保護団体・人権擁護団体等であります。この点について、さらに説明を加える必要はないと思います。

聖書に記されている「スピリチュアル・ユニオン」

このように市民社会論を展開しながら、星野氏は最後にこう言います。

市民社会では「ひとつの目的によって、日本人も外国人もなく、貧しい者もそうでない者も、それぞれがその能力や特色に応じて、協力して一つの体として働く。目が手に向かってお前は要らないとは言えず、頭が足に向かってお前は要らないとは言えないようなものである。それどころか、体の中で他よりも弱く見える部分がかえって必要である。そこでは、一人の苦労は他の者の苦しみ、一人の喜びは他の者の喜びである」というところにある。そこでは、たまたま「上の仕事をしている者は、他の者に仕える者」である。

これは、星野氏が、市民社会の特色を言い表すために、新約聖書（コリントの信徒への手紙一 一二章一―一三節、マルコによる福音書 九章三五節、ルカによる福音書 二二章二六節）を少し言い換えた言葉です。私はこのくだりを読んでちょっと驚きました。岩波新書というごく一般的な書物の、市民社会論という、とくにキリスト教と関係ないように思える議論のなかで、唐突に聖書の言葉に出会ったからです。滅多にないことです。星野氏はカトリックの信仰に立つ民法の大家であることを、後で知りました。

唐突に聖書の言葉に出会って驚いたと申しましたが、よく考えてみれば、私自身も市民社会とキリスト教、とくにピューリタニズムとの関連を多少考えてきたのですから、本当は驚くことはないのです。そして、さらに思いました。ここで述べられているのは、まさに、人間相互の、人間集団相互の「スピリチュアル・ユニオン」というか、霊的結びつきというか、なにかそのような関係ではないでしょうか。新島先生は、かつて、二つの教会の合同に反対しつつ、「スピリチュアル・ユニオンの行はれん事を」と言われました。それは異なった見解をもつ教会と教会の関係のなかに市民社会的な関係を確保しようとした言葉だとすれば、その市民社会の核にそういう霊的關係を見ておられたのではないのでしょうか。それは推測にすぎません。しかし、同志社スピリットにはそのような要素が含まれているように私には思われてなりません。最後に、星野氏が少しモディファイして引用した教会に関する聖書の一部を読んで私の話を終えます。これは使徒パウロの言葉です。

「体は、一つの部分ではなく、多くの部分から成っています。・・・多くの部分があっても、一つの体なのです。目が手に向かって『お前は要らない』とは言えず、また、頭が足に向かって『お前たちは要らない』とも言えません。それどころか、体の中で他よりも弱く見える部分が、かえって必要なのです。わたしたちは、体の中でほかよりも格好が悪いと思われる部分を覆って、もっと格好よくしようと、見苦しい部分をもっと見栄えよくしようとします。・・・神は見劣りのする部分をいっそう引き立たせて、体を組み立てられました。それで、体に分裂が起こらず、各部分が互いに配慮し合っています。一つの部分が苦しめば、すべての部分が共に苦しみ、一つの部分が尊ばれば、すべての部分が共に喜ぶのです。」（コリントの信徒への手紙一 一二章一四―二六節）

二〇〇八年十一月七日 同志社スピリット・ウィーク「講演」記録